Osaka University Knowledge Archive

Title	韓国語の助詞〈ui〉と日本語の助詞〈ノ〉の比較対照研究
Author(s)	崔, 吉時
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/29180
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 1 】

氏　　名	崔（ちえ）　吉時（きるし）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第　12670　号
学位授与年月日	平成 8 年 8 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科　言語文化学専攻
学 位 論 文 名	**韓国語の助詞〈의〉と日本語の助詞〈ノ〉の比較対照研究**
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授　今井　光規 (副査) 教 授　津久井定雄　　助教授　日野　信行

論 文 内 容 の 要 旨

第 1 章　緒論

韓国語と日本語は言語形態上同じ膠着語である。その膠着語で文法的役割を果たしているものとして助詞がある。その中で，体言に付いて修飾語をつくる機能をもった韓国語の助詞〈의〉と日本語の助詞〈ノ〉は，一見全く同じ文法要素と思われるが，実際言語使用の場において両者の出現頻度の違いや〈ノ〉の多様な機能に戸惑うことになる。〈의〉と〈ノ〉の比較対照に関する先行研究は幾つかあるものの，まだ全体的な比較対照がなされておらず，対応関係も明確にされていない。

本研究では，現時点においての，韓国語の助詞〈의〉と日本語の助詞〈ノ〉の全ての機能について比較対照し，両者の同質性と異質性を明らかにする。さらに共通する機能においては，〈의〉の出現・非出現の条件を究明し，〈ノ〉独自の機能についてはそれに対応する韓国語の表現を探求することにする。それによって，まが明らかにされていない両言語の特徴の解明や両言語間の二言語教育にも役立つことを期待する。

第 2 章　〈의〉と〈ノ〉の先行研究調査とコンコーダンス作成

(1)　〈의〉と〈ノ〉を比較対照した先行研究としては次のようなものがあった。

① 徐 景 淑　(1988)「韓・日兩國語の格助詞「の」と「의」の對照―連体修飾を中心にして―」韓國外國語大學校

② 張 正 來　(1988)「韓・日両言語における「助詞」の比較対照研究―格助詞「の」と「ui」の場合―」中央大學國文學會

③ 生越直樹　(1989)「文法の対照的研究―朝鮮語と日本語―」明治書院

(2)　これらの先行研究は次のような点が不十分であると考えられる。

・三論文とも，〈의〉・〈ノ〉の機能の一部だけの比較対照にとどまり，両者の全体的な共通機能と独自機能が明らかにされていない。

・論文①・②は，〈의〉・〈ノ〉の前後にくる語彙に対する意味的役割について比較対照している。これでは，〈의〉・〈ノ〉

の使用上の差異を理解するのに不十分である。

・取り上げている例文が不十分である。

・〈의〉の出現・非出現の問題に関する論議が不十分である。

〈의〉と〈ノ〉の機能や使用頻度・使用上の差異等を調べる為には，資料として適切で十分な例文が必要であるので，コンピューターを利用して〈의〉と〈ノ〉のコンコーダンスを作成した。両国の小学校の1年～3年の国語教科書（※参照）の全内容をコンピューターに入力・処理し，〈의〉・〈ノ〉のコンコーダンスを得た。（コンコーダンスは本論文の付録として添付する）

※・韓国の国民学校の国語教科書（国定）「1年―1」～「3年―2」（読み方）六冊

・日本の小学校の国語教科書（教育出版発行）「1年―上」～「3年―下」六冊

第3・4章　〈의〉と〈ノ〉の共通機能の比較対照・〈ノ〉の独自機能と韓国語の対応

両国文法での〈의〉・〈ノ〉の分類と，両言語の対応関係を念頭において，用例の一つ一つをチェックしながら，その機能を分類した結果は次の通りである。

〈의〉・〈ノ〉の機能区分とその名称

区分	〈의〉	〈ノ〉	機　　能
共通機能	冠形助詞	連体助詞	体言に付いて連体修飾語をつくる機能
	主格助詞	主格助詞	連体修飾節の中での主語を示す機能
〈ノ〉独自機能		対象格助詞	連体修飾節の中での対象語を示す機能
		同格助詞	名詞に付いて後の名詞と同格であることを示す
		連用格助詞	体言について次の比況の助動詞を修飾する機能
		準体助詞	文中において体言と同じ役割を果たす機能
		並立助詞	二つ以上の事柄を並べる機能
		終助詞	文や句の終わりに付き，断定・疑問等を示す機能

以上の機能区分に基づいて，作成したコンコーダンスを基本資料として，共通機能については主に類似点・相違点と〈의〉の出現・非出現問題を，〈ノ〉の独自機能については主に韓国語との対応関係を探索した。その結果は「第6章」の通りである。

第5章　17・8世紀頃の〈의〉の機能

17・8世紀頃の〈의〉の機能を調査した。それは，現在の〈의〉の「主格助詞」機能が，17・8世紀ではどうだったのかを調べるためである。調査資料としては，朝鮮中期以後日本語訳官達の日本語学習教材であった『捷解新語』の最初の修訂版である『改修捷解新語』（18世紀出版）と，17世紀の代表的な韓国の古代国文小説（ハングルで書かれた小説）である『九雲夢』を用い，前者については出現している〈의〉と〈ノ〉を対比し，後者については用いられている〈의〉の機能を調べた。結果は「第6章」の通りである。

第6章　結論

(1)　〈의〉と〈ノ〉の共通機能の比較対照結果

	〈의〉	〈ノ〉
名称	①冠形助詞　②主格助詞	①連体助詞　②主格助詞
機能	①体言に付き連体修飾語を作る ②連体修飾節の中での主語を示す	①体言に付き連体修飾語を作る ②連体修飾節の中での主語を示す
対応	①「～의」（非出現の例の2倍程多い） ②「～이／가」・「～의（制限的使用）」	①「～の」（非出現が極一部） ①「～が」・「～の（制限なし）」

特徴	①条件によって非出現する場合が多い ②連体節の述語が動詞の場合のみ，主に文語的表現で用いる	①ほとんどが必須的出現・副詞にも付く ②連体節の述語に制限なし（動詞・形容動詞・形容詞）

冠形助詞・連体助詞の両者の大きな相違点は，〈ノ〉の出現が殆ど必須的であるのに対して，〈의〉は出現しない場合が多いことであった。ここで，〈의〉が必須的に出現している場合(A)，出現してもしなくてもよい場合(B)，出現しない場合(C)の三つの条件を明らかにした。

主格助詞機能としては，〈ノ〉が一般的によく用いられているのに対して，〈의〉は制限条件があり，生活口語としては殆ど使われていないことが明らかになった。

(2)　〈ノ〉の独自機能と韓国語の対応

〈ノ〉		韓国語の対応
名　称	機　　能	
対象格助詞	連体節の中での対象語を示す	「～을／를」，「～이／가」
同格助詞	名詞に付いて，その後の名詞と同格であることを示す	「～인」（出現していない場合もある）
連用格助詞	体言に付いて，その後の比況の助動詞を修飾する	〈ノ〉様だ・如し：「과／와」같다 〈ノ〉様に・如く：「～처럼」
準体助詞	文中において，体言と同じ役割を果たす	①「～의 것」，「것」 ②「것／거」，「데・점」，「～기」 ③「것／거」，「終結語尾」
並立助詞	二つ以上の事柄を並べる	「～(으)니」，「～느니」，「～(이)니」「～는동」，「이러쿵 저러쿵」
終助詞	文や句の終わりについて，①断定　②疑問　③命令　④感動等を表す	①常体：「～(이)야」，「～아／어・～지」 敬体：「～이에요」，～「아요／어요」 ②常体：「～(이)니？」，「～아？／어？」 敬体：「～에요？」，「～아요？／어요？」 ③常体：「～아／어」，「～아라／어라」 敬体：「～아요／어요」「～(으)세요」 ④常体：「～그려」，「～구나・～군」 敬体：「～군요」

(3)『改修捷解新語』に出現している〈ノ〉と〈의〉の比較対象

〈ノ〉			〈의〉		
連体助詞	連体修飾語を作る（副詞にも付く）	出現 369	冠形助詞	連体修飾語を作る	出現 84
主格助詞	連体節の主語を示す	31	主格助詞	連体節の主語を示す	2
対象格助詞	体節の対象語を示す	8			
連用格助詞	連用修飾語を作る	19	副詞格助詞	連用修飾語を作る	65

〈ノ〉の出現は上の表の通りであるが，現在の〈ノ〉がもつそれ以外の機能である同格助詞・準体助詞・並立助詞・終助詞の用例は見当たらなかった。

18世紀の〈의〉は，現在にはない副詞格助詞（連用格助詞：日本語の格助詞「～に」に当たる）として盛んに使われていたことが分かった。

(4) 『九雲夢』に用いられている〈의〉の機能と出現回数

〈의〉の機能	冠形助詞	主格助詞	目的格助詞	副詞格助詞	総計
出現回数	936	103	3	871	1,913

この調査の最も重要な目的である〈의〉の主格助詞機能に関しては，その用例が統計のように多数発見され，さらに現在ではその用例が見られない形容詞述語の主格助詞としても用いられていたことが確認できた。こういう点から，現在の〈의〉の主格助詞機能は何らかの影響を受けて20世紀初頭に新しく現れた現象ではなく，実は以前からあったものが衰えてきたことがわかり，〈의〉の機能が全体的に縮小されてきたことが明らかになった。

おわりに

〈ノ〉は近代以降，機能が拡大されており，連体助詞〈ノ〉の出現はほぼ必須的であるといえる。一方，〈의〉の機能は以前より縮小されており，冠形助詞〈의〉は出現していない場合が多い。その上，現在も発音しにくいことから，音声上〈의〉の存在がしだいに薄れつつある。この現象はさらに文字言語にも影響を及ぼし，将来助詞〈의〉が別のものに変わる可能性も考えられる。

今後も，韓国語と日本語の比較対照の研究を続け，両言語の同質性・異質性を探究すると共に，長い間漢字文化圏で，漢字・漢文の影響を受けざるを得なかった韓国語と日本語，その中で特に，中国語の「的」が〈의〉と〈ノ〉に何かの影響を及ぼしたかどうかを研究したい。このような研究の成果をもとに，両言語間の二言語教育の効率的な方法の開発に役立てていきたい。

付録1 「韓国国民学校教科書（1-1～3-2）語彙統計処理結果」

付録2 「日本小学校国語教科書（1-上～3-下）語彙統計処理結果」

付録3 「韓国語の助詞〈의〉の出現コンコーダンス」

付録4 「韓国語の助詞〈의〉の非出現コンコーダンス」

付録5 「日本語の助詞〈ノ〉の出現コンコーダンス」

付録6 「日本語の助詞〈ノ〉の非出現コンコーダンス」

付録7 「改修捷解新語」での〈의〉と〈ノ〉

論文審査の結果の要旨

この論文は，韓国の国民学校国語教科書と日本の小学校国語教科書を主な資料として，それらの資料から独自に編纂したコンコーダンスを活用しながら，韓国語の助詞〈의〉と日本語の助詞〈ノ〉の使われ方を比較対照することによって両者の同質性と異質性を解明することを目的とし，併せて両言語間の外国語教育に資することを目指すものである。それら二つの助詞のもつ共通の機能については〈의〉の出現・非出現の条件を研究し，〈ノ〉に独特な機能については韓国語でどのような表現がそれに対応するかを探っている。この論文は基本的には共時的な研究であるが，〈의〉の主格機能の考察には，17・18世紀の資料を使い，通時的方法も併用している。

この論文は6章からなる。まず第1章で，上記のような課題の設定を行い，第2章では，これらの二つの助詞の比較に関する先行研究の問題点を指摘するとともに，その問題解決の一助として著者が行った，資料のコンコーダンス化に関する詳細を記述している。つづく第3章では，〈의〉と〈ノ〉の共通機能の比較，すなわち「冠形助詞」「連体助詞」としての，および「主格助詞」機能からみた，両助詞の比較を行っている。第4章では，〈ノ〉の独自機能と韓国語の対応を論じている。第5章では，17・18世紀の『改修捷解新語』と『九雲夢』を用いて，当代の〈의〉の機能を調査している。第6章は，全体をまとめて結論を述べた部分である。本論文には付録として，品詞別の韓国国民学校国語教科書および日本の小学校国語教科書の語彙統計処理結果，〈의〉と〈ノ〉の出現・非出現2様のコンコーダンス，さらに『改修捷解新語』における両助詞のリストが収められている。

この論文の最も優れた点は，豊富な用例に基づいて両助詞の使用状況を詳細に記述し，正確な統計をとっていることである。

先ず，〈의〉と〈ノ〉の共通機能の比較対照の結果，冠形助詞・連体助詞としての両者の相違点として，〈ノ〉の出現が殆ど必須的なのに対して，〈의〉は，必須的に出現する場合，出現・非出現のいずも可能な場合，および出現しない場合の三つの場合があることを指摘し，それぞれの場合の条件を詳しく記述している。また，主格助詞機能に関しては，〈ノ〉が一般的によく用いられているのに対して，〈의〉は使用が限られており，口語としては殆ど使われていないことを明らかにしている。

次いで，〈ノ〉に独特な機能とそれに対する韓国語の対応ついては，先ず教科書における用例の分析によって，その対応関係を詳述している。次に，17・18世紀の資料の調査によって，今日の〈ノ〉がもっている同格助詞，準体助詞，並列助詞，終助詞としての機能の用例がその時代の資料には見られないことを明かにしている。さらに，18世紀の〈의〉は，今日の用法とは異なり，副詞格助詞（日本語の格助詞「～に」に当たる）として盛んに用いられていたことを観察している。また，〈의〉の主格助詞機能に関しては，今日用例が見られない形容詞述語の主格助詞としても使用されていたことを確認している。このことから，今日の〈의〉の主格助詞機能は，例えば日本語の影響を受けて20世紀初頭に新しく現れた現象ではなく，それ以前から存在していたものが衰えてきたものであること，〈의〉の機能が全体的に縮小されてきた可能性が大きいことを指摘している。

この論文は，記述に使用された分類法や記述の細部に僅かながら適切でないところがある。前述のように本論文は，専ら韓国語の助詞と日本語の助詞の実際の用法を詳しく比較対照することによって両者の同質性と異質性を明らかにすることを目指したものであり，それらの助詞の本質を普遍的な言語理論によって議論することを目的とはしていないが，論文全体について，外国語教育理論を含め，理論面をさらに深くつきつめることが今後の課題となるであろう。また，この論文の通時的な研究の部分で得られた結論は，さらに多くの資料に当たって実証することが必要である。

しかしながら，総体的に見ればこの論文は，第１に，上述のとおり豊富な用例に基づいて両助詞の使用状況を詳細に記述し，客観性のある統計を用いていること，第２に，資料のテクストを電子化して綿密なタギングを施し，〈의〉と〈ノ〉の出現箇所だけでなく非出現箇所までも容易に検索できる優れたコンコーダンスを完成させたこと，第３に，そのコンコーダンスを活用して，日韓両言語の外国語教育の場で学習者・教師のいずれにも利用価値の高い記述と分析を行っている点で，大きな貢献をなし，今後の研究の基礎を作ったといえる。

以上の諸点から，この論文は，博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値のあるものと認められる。